idea

ニュースレター「イデア」

2022.6

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　Aimi Bellさん・一関市国際交流協会　垣内幸治さん(前編)
3｜団体紹介｜　一関市スケートボード協会
5｜地域紹介｜　小沼集落（花泉）
7｜企業紹介｜　有限会社 川崎タクシー（川崎）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴㉓ 地域に発信すべき情報
9｜センターの自由研究｜　くらし調査ファイルNo.16「冷蔵庫のない暮らし①」

今月の表紙

重厚な木製戸棚のようにも見えるこの扉。当地域においては上流階級を中心に昭和20～30年代頃に利用されていた「氷冷蔵庫」の上段部分です。二段式になっており、上段に大きな氷を入れ、その冷気を利用して下段に入れた食品を冷やしていました。当地域ではあまり普及しなかったこの冷蔵庫……では逆に、冷蔵庫のない時代のくらしとは？（自由研究）

idea ニュースレターイデア

発行　いちのせき市民活動センター　〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415　ホームページ:https://www/center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp

せんまやサテライト　〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736

おしらせ

募集　一関市国際交流協会 ボランティアバンク

一関市国際交流協会では、国際交流や多文化共生に関心のある方、他国の文化にふれてみたい方など、自分の興味・関心や得意分野を活かしたボランティアスタッフを募集(ボランティアバンクへの登録)しています。詳しくは下記までお問合わせください。

名称:ボランティアバンク
内容:下記カテゴリーにおけるボランティアの登録制度
通訳・翻訳/文化紹介/外国語・日本語講座/日本語支援/ホームステイ受入/国際交流活動　※複数登録可
問合:0191-34-4711
（一関市国際交流協会）

情報　一関市スケートボード協会 ビギナーズスクール

本誌「団体紹介」にてご紹介した「一関市スケートボード協会」では、日曜日(冬期・雨天除く)を中心に、市内外のスケートボード愛好者が集まり、練習に励んでいます。

毎月第4日曜日は、ビギナーズスクールとして、スケートボードを始めたばかりの子どもたちなどに、協会員が優しくレクチャーしています(要申込)。見学も可能ですので、興味のある方は下記までお問合わせください。

日時:毎月第4日曜日　11時～
会場:一関水泳プール裏駐車場
問合:090-2975-3354
（一関市スケートボード協会　代表補佐・佐藤）

情報　一関市川崎市民センター（川崎まちづくり協議会）ホームページ開設

川崎地域の地域協働体「川崎まちづくり協議会」が2022年3月にホームページを開設しました。

市民センターや地域協働体の事業紹介、川崎まちづくり情報誌「かわ・らばん」、「水色ウサキ」の紹介などを見ることができます。ぜひご活用ください。

※右のQRコードからもホームページをご覧いただけます。

URL:
https://usaki31.jimdofree.com/
問合:0191-43-3112
（一関市川崎市民センター内）

募集　藤沢病院 病院・介護施設ボランティア

地域の役に立ちたい、ご自身の経験、趣味を生かしてみたいという方など、ボランティア活動をしてみませんか。外来の受付や院内の案内、病棟・介護施設での配膳・下膳、趣味活動の展示、傾聴、散歩の付き添い、植木の手入れなど、やってみたいことを関係部署と調整します。ご相談、お申込みは随時受付中。詳しくは下記までお気軽にお問合わせください。

※ボランティア活動中は、ケガ等を補償する保険が適用されます。

場所:一関市国民健康保険藤沢病院ほか関連介護施設
（一関市藤沢町藤沢字町裏地内）
問合:0191-63-5253(病院事務局)

講座　自治会長サミット Vol.14

自治会や民区、集落公民館など、地縁活動を担う組織の三役レベルのみなさんに向けた情報交換の場「自治会長サミット」。今回は、「新しい住民の巻き込み方」をテーマに市内2か所の自治会長から、新しく地域に移り住んだ人への接し方や地域の活動へどうアプローチしているかを伺います。完全申込制(6月22日締切)、先着30名の定員です。

開催日時:2022年6月29日(水)
13時30分～16時
会場:一関市東山市民センター
2階大会議室
問合＆申込:0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

募集　イチコレ　第3回コンテスト モデル・スタッフ募集中

「いちのせき市民モデルコレクション（通称:イチコレ）」では、「イチコレ第3回コンテスト」に参加するモデルと、一緒にイチコレを創っていくスタッフを募集します。併せて、専用ホームページを立ち上げました。募集の詳細のほか、過去の様子もご覧いただけます。右のQRコードを読み込むか、下記URLで検索してください。

URL:ichicolle.net
開催日:2022年9月4日(日)
モデル申込締切:6月30日(木)
問合＆申込:0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「手作りの〇〇○〇セット」

直径5・5㎝、高さ15㎝の木の棒に数字が書かれたコチラ。フィンランド発祥の「モルック」というボーリングのようなゲームに使う道具です。「モルック」を各種事業に取り入れようと、永井地域コミュニティ活性化協議会で手作りしたもの。永井でブームになるかも!?

旧町村別の人口動態等を共有します。

2022年5月1日付
(2022年4月30日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	110646	-33
世帯数	46369	131
出生数	45	11

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	54963	76	24499	107
花泉	12274	-9	4707	13
川崎	3325	-11	1281	-4
千厩	10029	2	4113	24
大東	12236	-37	4919	-6
東山	6013	-15	2283	1
室根	4527	-18	1777	0
藤沢	7279	-21	2790	-4

162・163/110,646

Aimi Bell　垣内 幸治

【ベル アイミ】父親がオーストラリア人、母親が日本人（東京出身）。オーストラリア出身で、平成27年に来日し、宮城県気仙沼市で外国語指導助手（ALT）を務めた後、平成30年から一関市内で働いている。気仙沼市出身の日本人男性と結婚し、現在は花泉町在住。

【垣内 幸治】令和２年２月発足の一関市国際交流協会事務局長。旅行が趣味で、複数の国を訪れる中で気軽に外国人との交流が持てるように。東京生まれ。本業は農家。

第96回　一関市在住　外国籍市民　ベルアイミさん
一関市国際交流協会　事務局長　垣内幸治さん　×　いちのせき市民活動センター　センター長　小野寺 浩樹

「くらしの思考」を「国際化」
～言語ではない寄り添いかた【前編】～

令和３年３月末現在、当市には８６４人の外国籍市民が居住[※1]しており、うち18歳未満は55人。それは市内の教育機関に通う外国籍の児童生徒が少なからずいるということ。市では「外国人にやさしいまちづくり」「多文化共生社会の地域づくり」を推進していますが、当市での「くらし」を、外国籍市民のみなさんはどのように感じているのでしょうか。そこから見えてくるものとは？（２回シリーズの前編）。

小野寺　技能実習生含め、市内全域に様々な国出身の外国籍市民が生活しています。アイミさんは日本語がお上手ですが、一関で暮らしていて困ったことはありますか？

アイミ　私はそこまでないけど、あるとすれば医療のことかな。どこの病院に行けば良いか、どのタイミングで行ったら良いかがわからなかった。日本人でも体調崩したりしたら悩むと思うけど、そこに言語の問題が加わるから、ストレスを感じるという話は聞きますね。

小野寺　確かに我々日本人の一関市民でもどこの病院を選んだら良いか悩むのに、そこに言語の問題が加わると大変ですよね。

アイミ　オーストラリアだと「GP[※2]」と呼ばれる子どもの頃から通う総合窓口のような病院があって、自分の身体の歴史もわかっているので、「なんとなくの違和感」を感じたら、まずはそこに行きます。症状によってはそこからもっと具体的な病院をセッティングしてくれるので、一回もどこの病院に行くかで悩んだことはありませんでした。でも日本は最初から具体的に症状を自己判断して、症状に合わせた病院（診療科）に行かなきゃいけない。身体は全部つながってるんですけどね。

垣内　身体まで縦割りなんですね、日本は。病院で「様子見ましょう」と言われることに対し、外国籍の人からは「何のために行ったのか」と思ってしまうという声も聞きます。

小野寺　日本ではわりとよくある対応なので、慣れてしまっていましたが、確かにそうですね。

垣内　処方薬や治療内容について質問をしたら怪訝そうな顔をされてしまったと驚いていた外国籍の人もいました。日本のお医者さんは崇め奉られているようなところがあるからね（笑）

※１　令和４年３月公開の「一関市在住外国人アンケート調査報告書」より。
※２　一般開業医(General Practitioner-GP)のこと。オーストラリアでは専門医(Specialist)や病院(Hospital)に行く前に、GPを受診することが一般的。

小野寺　ちなみに通訳さんがいる病院って市内にあります？

垣内　奥州市の国際交流協会[※3]が病院への通訳ボランティアを派遣していて、連絡すれば一関の病院にも来てくれることになっています。

アイミ　ＡＬＴをしていた時は、所属する派遣会社が付き添いの人を用意してくれました。通訳までは無理だけど、病院内の案内とか、心のサポートをしてくれて。検査の時には「次はあっちで〇〇をして」など、いろいろ言われますが、けっきょくどこに行って何をしたら良いかわからなくなる（笑）そういう時にシステムを教えてくれる人がいるだけで助かりますね。

小野寺　通訳は無理でも、せめて病院の案内など付き添いの仕組みだけでも欲しいですよね。公立の総合病院などには病院ボランティアという人がいますが、高齢者向けのボランティアであって、外国籍市民は視野に入っていないかもしれない。

アイミ　ちなみに、私は7月に出産予定なんですが、病院に行く最初のタイミングがわからなくて。それに、産婦人科なのに、診てくれるけど産めない病院があったり、びっくりしました。

小野寺　僕の知人にも外国籍市民の妊婦さんがいて、お腹が大きくなってきても産科未受診だったんです。結局、僕の妻が病院に連れて行きましたが……。

アイミ　システムがわからないことは多いですね。例えばオーストラリアには車検のシステムがなかったので、日本の車検制度に最初は驚きました。

小野寺　車検制度がない国もあるんですね！他にもシステムが違うものってあります？

アイミ　日本在住の外国人ユーチューバーが日本の「あるある」を紹介していて、そこで話題になっていたのがゴミ出し。失敗談のある外国人は多いと思います。私も以前に間違えたことがあり、「日本にはルールがあります」と注意されたんですが、ルールは日本だけでなくそれぞれの国にありますよね（笑）

小野寺　そうですよね（笑）それに、日本の中でも市町村によってゴミ出しのルールは違うし、一概に注意するのではなく、少しそのルールの違いに目を向けた上で、改めてその土地のルールを共有するような姿勢が必要なのかもしれないですね。

アイミ　一関市には「市民生活ガイドブック[※4]」や「ゴミ分別アプリ」の英訳版があるので、外国籍の人たちにも紹介しましたが、あまり活用されていないのが実態です。同じように、外国籍の人たち向けの避難訓練をしようとしたときも、「長年住んでいるから大丈夫」などの理由であまり集まりませんでした。「もう普通に生活できてるから問題ないよ」と思っているのかもしれないですが、地元の人でもわからないことが多い内容なので……。いざという時のために日頃から読んでおいたり、活用したりすればもう少しスムーズにいくかと思います。

垣内　我が国の行政は申請主義だから、相談に来た人の案件が全てになりがちで、我々含め、外国籍市民の現状が把握できていないのかもしれません。

アイミ　そもそも外国籍の人たちには市役所が何をする所かわからないので、「困った時に市役所に行く」という選択肢はないのかもしれませんね。市役所があまり身近ではない国もありますからね。

小野寺　外国籍の人たちが、生活の中で「困った時はここに相談に行く」という場所がないのは課題ですね。国際交流協会も「在住外国人支援センター」なんて名前なら良いのかも（笑）

垣内　今までが交流に偏りすぎてたから、今のニーズに合わせたサポートに重きを置いていく必要はありますよね。

アイミ　でも、面識のない人に相談するっていうのは難しいと思いますよ。他人には相談しないというか……。些細なことだと思うと余計に。だからみんなつながりを使って何とかしています。交流イベントでつながりができることもあるし、きっかけは大事だと思います。

（後編へ続く）

一関市国際交流協会
住所　一関市大町4-29なのはなプラザ4階
電話　0191-34-4711

※３　奥州市国際交流協会。「奥州市医療通訳派遣システム」の運営を行っている。
※４　『ICHINOSEKI LIVING GUIDE -市民生活ガイドブック英語版』。2022年度版は市役所ホームページから、2021年度試作版は「いちのせき電子図書館」でも閲覧可能。

団体紹介

初心を忘れず「スケボー」の魅力を伝える

一関市スケートボード協会

一関市スケートボード協会
前身となる「一関スケートボード倶楽部」を平成29年に発足し、令和３年10月に「一関市スケートボード協会」に改組。正会員は８人だが、同会の整備する拠点を利用する愛好者は小学生から59歳まで約40人。主な活動日は毎週日曜日(晴天時のみ)。

<Facebook> @Ichinoseki.Skateboard.Club
<Instagram> @ichinoseki._skate__association
TEL：090-2975-3354（代表補佐・佐藤利樹）

写真：イベント参加者との集合写真(令和４年５月)

五輪をきっかけに高まる注目

平成28年、スケートボード（以下、スケボー）が夏季オリンピック（以下、五輪）の追加種目に採用されると、それまでアウトローなイメージだったスケボーが注目を集め、東京五輪では見事に３個の金メダルを獲得した日本。

日本全体では盛り上がりを見せたものの、「地方ではスケボーやその愛好者への偏見がまだ残っている。日本にも有能なスケーターは多く存在し、プロスケーターを夢見る子どもたちもいる。遊び要素が強かったスケボーを、ようやく正式なスポーツとして受け入れてもらったが、大人も子どもも楽しく、気軽に滑れる環境には程遠い」と、一関市スケートボード協会の代表補佐・佐藤利樹さんは当地域における現実を見つめます。

同会の前身となる「一関スケートボード倶楽部」を平成29年に発足させ、「スケボー」という「カルチャー」の浸透と、理想の環境を創出するために奮闘する同会の「これまで」を伺いました。

様々な壁を乗り越えて

10代の頃にスケボーを始めたものの、20代後半には、価値観のズレや、結婚・育児も重なり、仲間とのスケボーから距離を置いていた利樹さん。一関運動公園を子どもと散歩していた時に、スケボーの練習をしている若者の集団と出会います。興味本位で声をかけたことを機に知ったのが「一関には気軽にスケボーができる場所がない」という現状でした。

自分たちも滑る場所を求めて苦労していた経験を思い出し、「今の若者と過去の自分たちを重ねて『一関にスケートパークをつくろう』と思い立った」という利樹さんは、34歳の時、かつて一緒に滑っていたスケボー仲間たちに声をかけます。スケボーショップとのライダー契約を結ぶほど（当時）の実力者・佐藤和雅さんに代表を依頼し、仲間12人と「一関スケートボード倶楽部」を発足させたのです。

会としてまず取り組んだのが、「スケボーができる場所」の確保でした。行政や体育協会等に働きかけたことで、一関運動公園の多目的広場の利用を提案されたものの、環境面で障害があり、利用を断念。その後も懇談や候補地での立ち合いなどを重ねた結果、ついに一関水泳プール駐車場の一画という利便性の良い場所を利用できることに！

イベントも開催するなど、会の認知度も上がって来た矢先の令和２年５月、同エリアに新型コロナウイルス発熱外来の仮設テントが設営されることに…。

拠点を失った同会は「どうせなら天候に左右されずに練習できる屋内を」と、約半年間も空き店舗などを探し、なんとか倉庫の賃貸契約を結ぶことに成功。会の役員数名で決して安くはない賃貸料を捻出するという覚悟の決断でしたが、「屋内パーク」という理想の環境を整えることができたのです。

しかし、会として注意を払い続けていたはずの騒音や利用マナーに対し、恐れていた近隣からのクレームが発生。令和３年７月、倉庫からの撤退を余儀なくされます。さらに、屋内拠点ができた時に役を引き渡した後輩からも「役を辞めたい」という申し出があり、会の継続は危機的状況に……。

「だけど、やっぱり『スケボーが好き』という気持ちは変わらず、逆に『自分たちがスケボーの出来る環境を整えていかないと』という気持ちが強くなった」と、立ち上げメンバーたちは振り返ります。その後、会の運営と活動場所等の模索を続け、令和３年10月、プロスケーターの育成や競技人口の拡大にも力を注いでいくことを視野に、「一関市スケートボード協会」へと改組。同時期に発熱外来の仮設テントも役目を終えたため、駐車場の一画での利用が再び可能となり、協会としての活動が始動しました。

夢は「スケボーパーク」の造設

「現在の活動場所は仮設パークで、あくまでも駐車場の一部を借りている状態。一度、役を退いた身ではあるが、僕たちの役目はスケボーをするための『環境の提供』だと思っている。場所がなければ子どもたちがスケボーを知るきっかけをつくれない。イベント時にプロスケーターを呼ぶことによって刺激に繋げる。そういう『環境』を整え、次の世代に交代していきたい」と、笑顔で語るメンバーたち。

常設の「スケボーパーク」造設を目指し、スケボーの魅力やカルチャーを伝えることに加え、愛好者のマナー向上など、理解を得るための活動にも尽力していきます。

Q.あなたにとってスケートボードとは？

立ち上げメンバー

A.SKATE LIFE!!

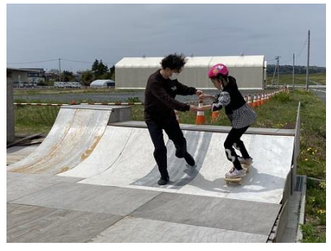
小野寺博明（おのでら ひろあき）さん(左)、佐藤和雅（さとう かずまさ）さん(中央：代表)、佐藤利樹（さとう としき）さん(右：代表補佐)

スケートボードをきっかけに10代で知り合った３人は、社会人になってからも一緒に滑るほど親交の深い仲です。小野寺さんは同会のオリジナルＴシャツやチラシなどのデザインを担当する「デザイナー」ポジション。

- Photo gallery -

同会のビックイベント
『RIVER SIDE SKATE SESSIONS』は倶楽部時代から開催。令和４年５月開催時は小学生や女性含め40人以上が参加！

みんなで修繕
室内に収納するスペースがないため、野ざらし状態のセクションを使用前後にしっかりメンテナンス。安全第一で滑ります。



キッズへ基本を伝授
令和４年４月に初開催したビギナーズスクールでは、子どもたちへ基本フォームを指導。スケボーの楽しさを伝えます。

練習環境を整えて
活動場所周辺の清掃活動にも取り組む同会。「ポイ捨てはしない」という基本的なルールを子どもたちに教えます。

地域紹介

「3戸」でも集落。現実と向き合いながら

花泉 小沼集落

小沼集落（老松）
　行政区は「老松６区」。令和４年５月現在は９戸30人程が暮らすが、うち６戸が10月までに移転するため、間もなく３戸９人（＋地区外居住の在籍者１戸３人）となる。老松の最南端で、永井地区（東永井）と隣接する。

左の写真：文化年間に描かれた「男沢村」の絵地図※の小沼集落部分。15戸程の住居が確認できる。
※宮城県図書館所蔵『〔流十三ヶ村絵図〕のうち流男沢村絵図』

河川の防災・治水事業で変わる集落の運命

「今年の10月までに移転しなければいけない家が６戸。他集落に移転完了しながら小沼に在籍している家が１戸あるけど、住居をここに構え続けるのは最終的に３戸だね」と、淡々と現実を語る集落公民館長の千葉充さん。自身は小沼集落に「残る」立場です。

金流川の下流に位置する花泉町老松の小沼集落は「北上川上流狭隘地区」にあり、治水対策対象範囲に指定されています。かつて小沼集落における金流川は大きく蛇行しており（上の絵図参照。右側、途中で切れている川が北上川と合流）、北上川の増水時には逆流（背水）とともに遊水地帯と化していました。水位が下がっても最後まで沼のように水が残ってしまったことが「小沼」という地名の由来とも言われています。

昭和22・23年のカスリン・アイオン台風を機に当地域の各河川では河川改修が本格化しますが、老松―永井間の金流川でも昭和33年頃から旧中小河川改修事業が実施され、小沼を流れる大きく蛇行した部分は、昭和40年代にショートカットとなり、集落の風景は大きく変わりました。

「平成25年に胆沢ダムが完成してからは水害はほぼなくなりましたが、長年議員さんたちとも連携しながら陳情を続けてきたこともあって、最近になって急に移転が決まった。決まってから移転完了までの期間が短いので、移転する人たちは今大慌てで移転作業を進めていますよ」と、充さんが複雑な表情で語るように、念願の移転である一方、中高年世帯にとっては将来展望と向き合う必要性に迫られ、移転対象とならなかった家にとっては、単独集落として維持運営していくべきか否か、大きな岐路に立たされています。

絵地図に残された集落の歴史

文化年間の「男沢村」の絵地図にしっかりと描かれている小沼集落。川の流れは変わったものの、家の並びは大きく変化がないように見えます。

集落の歴史について充さんは、「家の後ろにそれぞれ旧墓がある家が多いが、我が家の旧墓を数えた限り、８代目以上なのは確か」と語りますが、集落内には太さ６ｍを超える「千年杉」と呼ばれる杉の老木があるなど、かなり古くから集落が形成されていた可能性も。区長の及川治雄さんは「北上川にほど近い小沼の林の中に、１００基以上の旧墓があり、中世の舟運に関連したものではないか」とも推測します。

「先祖代々の土地を守るという一心で、耕作放棄地にせずに転作したり、人の居住していないエリアの県道も道路愛護として少ない人数での草刈りをしてきたが、今後は分からない。住居は移転しても、土地は残る。残る側の住人と管理契約をして転居する人もいるが、田畑の管理で精一杯で、道路や河川周辺の管理には限界がある」と、長年守り続けてきた土地・集落の今後が見えないのが現状です。

理想と現実
そこで暮らし続けるために

毎年元旦に新年会と抱き合わせて各種役員決めをしてきた同集落。10数戸の集落ですが、他の集落同等の役員推薦依頼があるため、一人3役は当たり前、多い時は7～8役を一人で担うこともあるとか。今後の世代のためにと、平成24年に老松公民館（当時）が作成した集落毎の地域づくり計画の中でも「地域内の役や組織の在り方の見直し」を謳ってきましたが、大きな改善のないまま、わずか3戸で他集落同等の役を担う時を迎えようとしています。

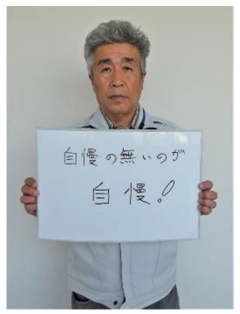
「同じ行政区の隣の集落（照盛）から集落再編の声もかけてもらったが、3戸だから役をこなせているという側面もある。隣の集落と一緒になると、徒歩では行くことのできない距離で広報物を回したり、集金が発生する。その負担を考えると、当面は3戸のまま単独集落とみなしてもらうのが現実的」という残された小沼集落住民の決断に、集落とは何かを考えさせられます。

今後の現実的な課題を伺うと、「まずはゴミ集積所。今の場所では利便性が悪い。そして道路愛護含めた景観・環境維持。ただでさえ不法投棄の多い場所なのに、移転後の空き家・空き小屋が残された状態が長く続けば、不法投棄や獣害が目に見える」と、小沼集落のみならず、中山間集落が今後向き合わなければいけない課題が急速にやってきたことがわかります。

約２００年前の絵地図にも描かれた小沼集落の、変わらないもの、変えざるを得ないもの……。その「選択」は容易ではありません。

Q.集落の自慢は何ですか？

集落公民館長



A. 自慢の無いのが自慢！

ちば　みつる
千葉　充さん

２期３年目。小学生の頃は、洪水になると通学路の途中まで集落の大人が舟で迎えに来てくれ、家の裏に続く山の入口までは舟に乗り、山から家に帰ったのだとか！

区長

A. 平泉文化の流れがありました。

おいかわ　はるお
及川治雄さん

隣接する照盛集落在住。区長として、集落再編や役の持ち方などについて、今年６月から検討の場を設けていく準備を進めています。小沼に残る歴史文化の今後も気にかけています。

- Photo gallery -

小沼を見守る存在

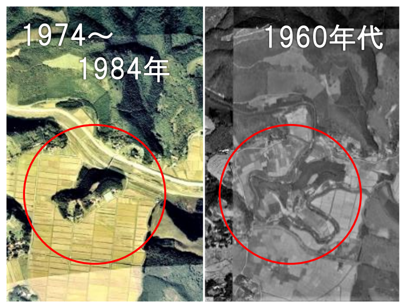
安永風土記にも記載されている「沼神社」とその付近にそびえ立つ「千年杉」。集落を見渡せる山中にあります。

集落課題を整理

老松みどりの郷協議会による集落懇談会の様子（令和２年度）。住民６人が参加し、集落の現状や課題を整理・共有しました。

ビフォー・アフター

昭和40年以前には絵地図と同様の河川の流れが確認できますが、昭和40年代後半には大きく様変わり。※国土地理院地図より



岩手には2つだけ

地中からの冷たい風で摂氏７度を保つ「小沼風穴」。蚕種の貯蔵に用いられたもので、集落で保存整備を行いました。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴㉓

地域に発信すべき情報

博識杜のフクロウ博士

第39話

情報発信は「予告」よりも「共有」重視!?

前号は**「自治会広報はデザインよりも内容」**という話題でしたが、今月は**「情報は‘発信’よりも‘共有’という視点が重要」**という話題です（前号の内容と矛盾はしない……はず……）。

一般的に情報発信は、「参加者が少ない」「自分たちの活動を知ってもらいたい」という動機から、‘予告’的に使われることが多いですが、実は、**「プロセス」や「成果」の‘共有’の方が重要**です（少なくとも我々は、予告よりもプロセスに関心が高いです）。

最近はＳＮＳの普及で誰でも様々な情報が発信できるようになり、予告的な発信だけでなく、プロセスや成果を目にすることも増えました。その多くは、プロジェクトベースのもので、新規事業のスタートアップやイベントなど、‘ファンを獲得する’という目的とイコールになっています。しかし、「まちづくり」や「地域づくり」に関する事業は、伝えるにはそれなりの文字量を要し、説明もややこしかったりするので、プロセスに関する情報発信は苦手とする傾向が……。

当センターもＳＮＳで地域の会議の様子を伝えることがありますが、会議の報告は絵面に代わり映えがないのが悩みの種……苦笑

先日、都市整備に関する会議に参加した時のこと。関係団体の長と地域の代表者が委員となり、工事の進捗や今後の展開などについて意見を交わしました。単なる説明会議ではなく、今後の設計に反映される期待もある内容のため、参加していても面白味があるのですが、ふと気になったのが**「この会議の内容はどこまで地域に共有されているだろうか？」**ということ。**委員となっている地域の代表者で情報が止まっていないだろうか？**と。地域住民にとっては日常生活の一部となるエリアの都市整備に関することであり、この情報は、**住民こそ知るべき内容**だと思うのですが……。

地域の代表者を委員に任命した理由としては、地域の代表者であることのほか、**会議内容を地域に持ち帰り、地域住民にフィードバックしてもらう役割**への期待が大きいのではないかと推測するのですが、〇〇報を見ても、一度たりとも目にしたことがありません（掲載スペースを確保できないなど、紙面の都合で載せていないだけで、地域の代表者から事務局等には共有されているかもしれません。その時は悪しからず……）。

「市の会議だから市が議事録などを市民に発信すべき」という考えもありますが、市の発信だけでは、**地域にとって「どのくらい自分たちに関係するか」**など、具体的に伝わってこないこともあります。地域にとって必要な情報は、**会議参加者が必要性を切り取る**ことによって、**‘リアル’を伝えることができる**のです（地域に関わる会議を開催する市は、会議参加者に対し、そうした**地域への共有**を促すアナウンスをすることも必要です）。

このように、「伝える」と一言で括っても、伝える内容は多種多様であり、実は、「広報は難しいもの」という認識をいつも持っています。新聞記者の方（元職・現役）ともお付き合いがあり、広報についての議論もさせていただくのですが、プロの新聞記者の視点は、**‘行間を読ませるような記事を書く’**ことだそうです。‘行間を読ませる’とは、ストレートには書かず、**読者に感じて欲しいことを含ませて書く**ことを指し、それは職人技です。ですが、広報を軽んじて考える人も少なくなく、「〇〇報を作れば広報の仕事」としてしまいがちですが、広報こそ**「戦略（発行計画）」**を持って、紙面構成を考え、じっくりと考えて作るべきものなのです。

自治会広報は、‘楽しく親しみやすく’がモットーでも良いのですが、市民センター広報や団体の会報などは、その組織の存在意義から考えても、浅い内容のものではなく、**住民や関係者への問題提起**となること、**知っておいてもらいたいこと**など、深みが求められます。「〇〇教室が開催されました」「みなさん、楽しんでいました」のような‘ました’‘でした’の報告事項ばかり並べられる広報では、関心を促すことはできません。**広報は、情報を「共有する」ための「手法」の一つであり、市民参加のきっかけづくりの役割**でもあります。

現代のように情報ツールがたくさんある時代、何を使って発信したらいいか迷うということもありますが、「**‘イマ’を伝えるＳＮＳ**」、「**‘公式な情報’を伝えるホームページ**」というように、使用用途を意識しないと、「**情報発信している‘つもり’**」になってしまいます。……と、またも自戒の念を込めて……（笑）

企業紹介

川崎　有限会社　川崎タクシー

昭和39年、宮城県本吉町（現気仙沼市）出身で、タクシー運転手をしていた現代表取締役の父・三浦勝三郎さんが創業。当時、川崎村にはタクシー会社はなく（村内で同時期に１社創業）、御縁あって現在地に開業すると、同じく本吉町出身の妻と二人三脚で会社を切り盛りし、「地域の方々の足」として58年間親しまれてきました。平成21年からは市営バスの請負、平成25年からは川崎小学校スクールバスの請負、令和元年からは福祉車両の導入、令和２年からは「便利屋タクシー」として買い物代行等にも挑戦。学校体育館や地域の研修センター、ゴミ集積所等の鍵管理も行うなど、多様な地域ニーズに応えます。

「地域交通」を支え、地域で頼りにされる存在へ

地域交通の変遷を見つめながら

古くから人や物の移動、情報を伝達するための中継地点として人馬の往来が多く、気仙沼街道や北上川の舟運などが発達した旧川崎村。昭和13年に旧北上大橋が開通、昭和29年には一関気仙沼線として主要地方道に、昭和45年からは一般国道２８４号線の指定も受け、交通の往来は盛んでしたが、昭和20年代後半に各地でタクシー会社ができる中、同村にはタクシー会社がありませんでした。

昭和39年、同村初となるタクシー会社を設立したのは、現代表取締役の父である三浦勝三郎さん。20年前に二代目を息子に譲り渡したものの、現在も同社の一員として地域の交通を支えています。

「昔は鉄道（陸中門崎駅）の利用も多く、駅から『村内の〇〇へ、隣町の〇〇へ』という利用も多かったのですが、今は電車の利用も朝晩の学生だけですからね……」と寂し気に語るのは、現代表取締役であり、ドライバーでもある三浦啓さんです。

当初は村民待望のタクシー会社であり、需要に応えるように従業員も雇用していましたが、「昭和50年代以降は自動車の普及によってタクシーの利用は随分と少なくなりました。平成15年に薄衣バイパスが開通したことで車の往来は盛んですが、川崎町内は『観光』というよりも『通過』が多いため、タクシー需要は家族４人（啓さん、啓さんの妻、初代、初代の妻）で十分対応できる程度です」と、タクシーのみでは人の雇用が難しくなっていました。

そこで同社では平成17年の新一関市誕生を機に、庁用バスや市営バス、スクールバスの業務を受託。パート従業員ではありますが、地域の雇用の場も守り続けています。

高齢化社会で高まる「生活の足」への不安

川崎地域の地域協働体「川崎まちづくり協議会（以下、まち協）」の会員でもある啓さん。「まち協がうまく機能して、地域と企業が連携を図ることが今後は大切。高齢化社会になった今、まち協に積極的に関わることでこれまで気がつかなかった地域の課題が見えてきた」と、一住民として参加する中で「生活の足」に対する「気づき」があったのだとか。

「川崎は普段通る国道以外、実は山なんです。平たい通りしか分からないかもしれませんが、住居の多くは山間部にあるんです。高齢の方々は、市営バスがあってもバス停まで移動することが大変。ましてや足腰も弱ってきている。そういった方々の生活の足に、我々にできることは何かと考えました」と、力強く語る啓さんが４年前に導入したのが「福祉車両」。さらに、一関市に申請を行い「便利屋タクシー」として、買い物や診察券提出代行、飲食店等のデリバリー、タイヤ交換やバッテリーチャージなど幅広く展開中です。

「申請から1年、周知不足で実際には機能していない」と言いますが、今後は、山間部に住居を持つ高齢者などにも当該事業を周知し、「地域の方々の不安を安心に変えるお手伝い」に力を注いでいきます。

1　タクシーの多くは2駆ですが、山間部を走る同社車両は4駆です。

2　一関市交通指導隊員としても活躍している代表取締役の三浦啓さん。

3　令和元年導入の福祉車両（4駆）。

DATA
〒029-0202
一関市川崎町薄衣字如来地13-8
TEL 0191-43-2340

センターの自由研究

ミッション68 くらし調査ファイル№16「冷蔵庫のないくらし①」

現在では生活必需品であり、当地域においても昭和50年代後半にはほぼ一家に１台以上は普及した「電気冷蔵庫」。現代日本人にとって「冷蔵庫のないくらし」は考えられないものですが、日本の歴史においては「冷蔵庫のあるくらし」はつい最近の出来事。冷蔵庫のない時代のくらしとはどのようなものだったのか、当地域における実情を調べていく中で、現代日本人にとっては盲点とも言える事実が様々見えてきました！

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

■ポイントは食文化

■当地域において**一般家庭への電力供給が始まったのは大正初期**。大正３年頃から市街地を中心に本格的な普及が始まり、農山村エリアへの普及は昭和に入ってからでした。戦争も挟み、ほぼ全戸に行き届いたのは昭和30年代。つまり、**昭和30年代までは多くの家が「電気冷蔵庫のない暮らし」**でした。

実は電気冷蔵庫の普及前に、全国的には「**氷式冷蔵庫**(左頁参照)」が普及しています。ところが、市内各所で氷式冷蔵庫に関する聞き込みをしてみても、使っていたという家庭はごくわずか。千厩や一関の街中に住んでいた商店主など、どちらかと言うと富裕層で何軒か確認できた程度でした。ちなみに、他県から嫁いだり、移住してきた中高年層に聞くと、高確率で氷式冷蔵庫の使用歴が！全国的には一時的にも氷式冷蔵庫が普及した中で、当地域では普及しなかったのは一体なぜなのか…。

調査を進めていく中で分かったのは**「冷蔵が必要な食品は食べていなかった＝井戸やムロで十分だった」**という、そもそもの**食生活・食文化が現代とは大きく異なっていた**、という事実でした。

農山村エリアは特に、各家に井戸やムロがあり、冷やしておきたい食材はその中に貯蔵しておきました。また、現代のように「生肉」「生魚」などの「要冷蔵食材」を「生のまま保管する」ということはなく、入手した時点で**塩漬けや味噌漬け**など、保存するための加工を加えていました(そもそも、そうした食材を食べる機会もかなり少ない)。

さらには**「行商」**の存在が。豆腐や納豆、牛乳など、井戸等での保管が難しい食材は、短いスパン(地域にもよりますが、農山村エリアでも２～３日に１回は来ていたらしい)で行商さんから購入することができました。大船渡線が開通すると、気仙沼の海産物などを取り扱う行商さんも出てきたため、**「その日に食べるものはその日に調達する」**という、**「生のまま食材を長時間保管する必要のない生活」**が確立されていたことが判明。

昭和30年代に入り、徐々に**食生活が豊かになるにつれて、「食品の安全管理」という概念**も広がっていき、食材を**「冷蔵」する必要性**が出てくるのです。

電気冷蔵庫普及までの道のり

旧町村で発行していた町勢要覧などからの数字を拾っていくと、当地域においては昭和30年代後半に電気冷蔵庫を購入する家庭が出始め、多くの家庭に普及したのは昭和50年頃と推測できます。

大正初期	電灯が入る(≒一般家庭への電力供給がスタート) ※一関は大正３年～、花泉は大正６年～、千厩・室根・大東は大正７年～
大正12年	アメリカの**電気冷蔵庫**が**日本に初輸入**される。
大正14年	**千厩・西小田**の**「氷採集所」「貯蔵所**(1万５千貫)**」**が飲用氷として県の認可を受ける
昭和３年	大船渡線開通(一関 ― 折壁)
昭和５年	**国産の家庭用電気冷蔵庫**が登場 千厩で**「氷屋組合」**発足＝**天然氷**が盛んに製造された
昭和10年	大船渡線全通
昭和20年(終戦)	白石薬局(千厩)に**木製冷蔵庫**が導入される この頃まで一関三反田付近でも**天然氷を製造**していた
昭和20年代後半	白石薬局(千厩)に**業務用の電気冷蔵庫**が導入される
昭和30年	高度経済成長期突入。**「三種の神器」**が爆発的に普及
昭和33年	一関の戦後開拓地では**電気と電気冷蔵庫**が同時に入る ※全戸への電力供給完了はこの頃
昭和35年	**(有)北進冷蔵**が気仙沼から千厩に進出
昭和38年	**藤沢**の**電気冷蔵庫普及率２％**
昭和39年	住宅改善運動・**台所改善運動**が各地で進む
昭和40年	**大東**の**電気冷蔵庫普及率9.2％**
昭和46年	**花泉**の**電気冷蔵庫普及率77.5％**
昭和53年	**花泉**の**電気冷蔵庫普及率102.8％**

氷と氷式冷蔵庫を深掘りしてみた

当地域において「氷式冷蔵庫」は一般普及しなかったことがわかったものの、気になってしまうのが「氷の入手方法」。氷式冷蔵庫はその名の通り、上段に入れた氷のかたまりによる冷気で下段に入れた食材を冷やします。電気式冷蔵庫すらない時代、どうやって氷を作り、保管したのでしょうか。

調査を進める中で、市内の複数箇所で「天然氷を作っていた」という場所の情報を入手！また、天然氷を作っていたとして、需要のある夏場まで本当に保管することができるのか、実際に当センタースタッフが実験してみました！

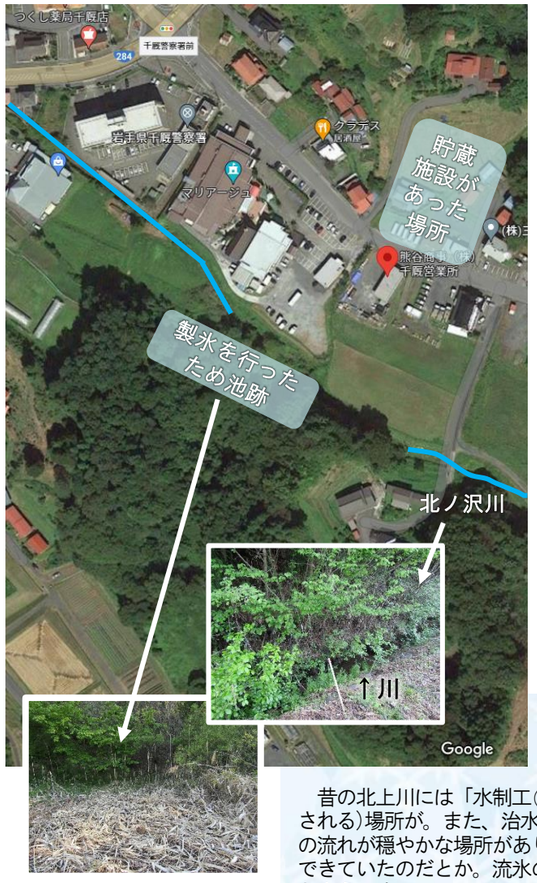
This is 氷式冷蔵庫！その構造と現

千厩町の「せんまや街角資料館」に展示されている氷式冷蔵庫。寄贈者等の情報は明確ではないようですが、当地域で使われていたと思われるものとのこと。木製の鍵付き戸棚のようになっていますが、内側面には断熱効果が得られるように**ブリキ**や**トタン**などが貼られています。

電気式冷蔵庫の普及とともに、一般家庭からは消えてしまいましたが、**食材が「乾燥しない」**という利点から、**現在でも高級鮨店や日本料理店では使われている**のだとか！当地域でも昭和50年代頃までは使い続けていた料亭や魚屋があったそうです(一般家庭用とは大きさや棚数が異なっていたと推測)。

実験！氷の保管はどれくらい可能!?

電気式冷蔵庫が普及する前は、各地に**「氷屋」**が少なからず存在していたことが判明。氷式冷蔵庫の所有有無に関わらず、「自転車で氷屋に氷を買いに行った」という経験がある人は複数いて「氷は**オガクズ**(木材を切る時に生じる細かい木屑)をまぶしてあった」という証言も。そこで当センタースタッフが実験をしてみたところ、**室温でも12時間以上カタチが残り続ける**という驚きの結果が！実験の詳細はホームページでご紹介♪



※誌面スペースの関係で、参考文献やご協力いただいた方のお名前はホームページにてご紹介させていただきます。

天然氷はどこで作られた!?

大正14年、千厩町の氷小売人・**金野新造氏**による「氷採集所」及び「貯蔵所」が県の認可を受けたという記事が岩手日報に残っています。この金野新造氏は**「金新商店」**として、千厩町の各所で天然氷を製造し、販売していたのだとか。そのうちの１か所、**北ノ沢のため池跡**に行ってみました！

天然氷の製造方法

岩手県千厩警察署からほど近く、現在では「マリアージュ千厩」さんの敷地付近は、かつては水田だったと推測。その南側を流れる北ノ沢川を利用して、天然氷を作っていたというのです！

北ノ沢川の後方に林がありますが、川と林の間に製氷用のため池が。そのため池には、川の流れをせき止め、ため池へと続く水路に川の水を流していたと考えられます。現在ではその水路はぼんやりと跡が確認できる程度ですが、ため池はその面影を残しており、地面はかなりぬかるんでいました。

調査にご協力いただいた東磐史学会の菅原良太さん曰く「日当たりの悪い西向きに面していて、水路と思われる形跡もある。近所の方の証言をふまえれば製氷が行われていた場所である可能性が高い」とのこと。

ちなみに、製氷を行った場所から貯蔵施設があった場所までは氷の塊を背負って運んだらしく、学生時代(昭和25～26年頃)にそのアルバイトをしていたという証言も！その方曰く「１回の運び方で３～５円貰えた。何回運べるか競って運んだ。１回毎にダンボールの券をもらい、その日の最後に券を出して稼いだ分をもらった。年２回は氷が出来た」のだとか。ロープでは滑って運べないそうで、わら縄を使ったそうです。

さらに、**北上川でも天然氷ができていた**ことが判明！天然氷ができるかどうかのポイントは**「水の流れがあるか否か」**。

昔の北上川には「水制工(すいせいこう)」があり、水の流れが少ない(制御される)場所が。また、治水対策が行われる前の蛇行した川であれば、水の流れが穏やかな場所があり、舞川(一関)や門崎(川崎)などでも天然氷ができていたのだとか。流氷のような状態になり、橋が壊れることもあったようです。※右写真は平成24年１月撮影の北上川。「シガ」と呼ばれる河氷の一種が流水のように流れている珍しい光景(NPO法人北上川サポート協会提供)。

次号では冷蔵庫がない時代の食生活・食文化を具体的にご紹介します！